



潜在意識の中から

[Subconsciousness]

中之 吹録

今日は朝一番から”その話”で社内中が沸き立っていた。

生存率はほぼゼロ、余命半年と言われた不治の病と見事3年間に渡って闘ってきた彼が奇跡の復活を遂げ、いよいよ出社する日が訪れたのだ。

当然、幼馴染で同期入社の人にもその話は耳に届いていた。

喫煙室で煙草を吸いながら、3人の話題は彼の話で持ちきりだった。

A：「あいつ、遂に克服したんだってな。凄いよな。よく頑張ったよな。午前中に挨拶だけの出社だったっけ。後でみんなで会いに行こうぜ！」

B：「そうだな、奇跡としか言いようが無いね。昔からあいつはそういう所は運がいいからな。」

C：「確かにそうだ。でも、闘病生活は俺らの理解出来ないような苦痛と苦労の連続だったと思うんだけどさ、お前らだったら余命半年の宣言受けたとしたらどうする？」

A：「俺かい？ そうだな・・・俺だったら、まずは会社辞めて、家族と一緒に残りの時間を過ごしたいな。仕事優先でカミさんともいい時間を作れなかったし息子はまだ小学生だからな。今まであまりかまってやれなかった分をその半年で取り戻して、幸せに終わりたいな。」

B：「Aはやさしいからな。俺は逆で、まずは速攻で離婚だね。うちのやつとはお前ら知っての通りで、社内恋愛の出来ちゃった婚で仲はあまり良くないしね。多分、看病も期待は出来ないと思う。で、退職して退職金で体が動くうちは遊びまくりかな？で、金が尽きて病気の前に野垂れ死にか飲んだくれてどっかで倒れて運ばれる救急車の中で大往生！これでしょう。で、そういうお前はどうかなのよ？」

C：「豪快が売りのBらしいね。俺かい・・・お前らの話、どっちも美味しいよな。でも、きっと俺は自然に任せるんじゃないかと思うよ。社内規定の打ち切り解雇が1500日だろ？まあ、そこまで生きてるかどうかは分からないけど、在籍して傷病手当もらって在宅か入院か・・・後は家内次第だな。看病で疲れて出て行くもよし、ずっと連れ添ってくれるのもよしって所かな？」

B：「ふーん、意外だな。お前が一番派手に行くと思ったんだけど。」

A：「おれもそう思った。意外とベタだな。」

Aが何気なく腕時計を見た。休憩時間を少し回っていた。

A：「あ！ヤベェ！休憩時間過ぎちゃったよ。戻ろうぜ。また後でな！」

3人が喫煙室を出ようと出口を見上げた時、彼はガラス越しにその3人の姿を見つめていた。

やせ細って青白い顔をした彼を思い出すのに時間は掛からなかった。3人は喫煙室を出て、すぐに彼の周りを取り囲んだ。

A：「おお！良かったな。治ったんだって？ちょっと痩せたけど、元気そうじゃないか！」

B：「戦いきった戦士の顔だね。俺には出来ないな。復帰おめでとう！今度は職場で戦おうぜ！」

C：「退院おめでとう。すまなかったね。俺たち最初の頃しか見舞いに行けなくて。」

彼：「いいよ、気にするな。返ってこっちが気を使う。ちょうど良かったんだ。」

彼は3人を上目遣いでジロリと見渡し、何かに憑かれたような面立ちでポツリと口を開き始めた。

彼：「いいよな、君たちは健康だ。話は外から聞こえたよ。でも話のように上手く世の中は回らないものさ。最初の3ヶ月は妻が身を挺して一所懸命に看病してくれた。私も少しは元気だったからね。あの頃が幸せの絶頂期だったよ。で、宣告の半年が過ぎた頃、家内は看病に疲れ始めた。俺も体調が下降し始めた時期だった。毎日来てくれた妻が2日に1回になり3日に1回・・・だんだんと来る回数も減ってきて、子供たちや親類もあまり見舞いに来なくなった。9ヶ月目・・・だったかな？家内は看病に疲れたと言い残して私に離婚届を置いて消えていったよ。きっと必至の看病もきっかり半年で死ぬのが前提だったんだな、彼女の中では。期限が有ったからこそ身を捧げて尽くせたんじゃないかと思うよ。彼女の気持ち解るだけに辛かったよ。悲しかった。そして悔しかった。家族ってこんなものかと恨んだね。死なない自分にも腹が立ったさ。そして1年が過ぎようとした。俺はまだ虫の息だったが生きていたよ。その頃、主治医から治験の話が持ち上がってね。この病気を何十年も研究してきた医学博士と大学の医療チームが病院代も持つんで是非とお願いに来たさ。俺は迷ったよ。もう家族はいないし、生きていても楽しみ以前に幸せを失っていたからね。しかも治験の成功率も俺が1例目なんで、どうなるか分からないし。いっそのまま静かに死にたいと思ったね。でも考えた。どうせ死ぬなら何もしないで死ぬんじゃないかって、次の人の為にでもなるんなら治験で死んでもいいかな？ってさ。今まで人の役に立ったことなんて無かったからね。で、それから2年。かなりきつい薬だったよ。TVでよく見る抗がん剤の副作用の比じゃなかったね。髪の毛こそ抜けなかったけど、副作用は、多分倍近い苦しみだったと思うよ。薬を打つたびに体の中で虫が這いずり回るような感覚と吐き気、めまい、幻聴、幻想、全身も内側から焼けるような熱さだったし、耐え切れずに現に4回心停止したからね。4回もだよ。途中で何回も治験を止めようと思ったけど、ここまで来たらと思ってもう少しだけ頑張ってみた。で、1年経った頃から少しずつ体調は良くなって来たさ。そして治験開始から23ヶ月だ。遂に主治医と治験医から完治の宣告をされた。で、リハビリをしながら出社って事になったんだが・・・」

3人は顔を見合わせ、ほぼ同時に、「じゃ、良かったじゃないか！」と口を揃えて彼に言った。彼は少しの間、天井を見つめ、そして空を仰ぐように息を吸い下に向かって大きくため息をついた。

彼：「そうじゃないんだ！たった1つだけ問題があつてさ。これが悩みの種なんだよ！」
細い声だったが、雄叫びをあげるように力強く叫んだ。彼は相当その問題に悩んでいるらしい。

A：「悩みって・・・病気も治ったし、何もないだろうさ。」

B：「そうだよな。外見上は問題ないし。」

C：「いや、悩みは悩みさ。俺たちが力になれるかもしれないし、言ってみなよ。」

彼はポツリと話し始めた。

彼：「実はね、治験に使った新薬はある特殊な酵素とバイオテクノロジーの最先端の産物なんだ。で、完治するとその後遺症が残る訳なんだが・・・」

A B C : 「後遺症 ??? って ? 」

彼 : 「歳を取る速度が極端に遅くなるらしいんだ。医者 の 計算によれば、あと300年は生きるらしい。この薬、健康な人に使っても同じ症状が出るんだってさ。俺、独りじゃ300年も生きられないよ。もう独りはたくさんだ ! どうだ ? 君らもこの新薬を使って俺と一緒にあと300年、俺と一緒に友達でいてくれないか ? 頼むよ ! もう俺には幼馴染の君らしか残ってないんだよ . . . ちょっと考えておいてくれ。返事は後で聞きに来るから。」

彼はそう言い残すと、何事も無かったような表情で挨拶回りの為に事務所の中に入っていった。

幼馴染の3人はその場で顔を見合わせた。お互い、何か少し恐怖さえ感じていた。

誰も会話が出来なかった。いや、声が出せなかったというのが正しい表現かもしれない。

3人はその場所に立ったまま氷像のように凍り付いていつまでも動くことが出来なかった。

そして3人が3人とも「これだけは絶対ムリ ! 」と思っていた。



遂に完成した。教授は出来上がった装置を見つめ、ニヤリと顔を歪めた。

「超弦理論が何だ！宇宙ひもがどうしたって？加速器のデーターで推測？・・・ふっ・・・この超素粒子顕微鏡で素粒子の中を見ることが出来れば、全てが見えるさ。アインシュタインの相対性理論だって根底から覆るかもしれないぞ。ホーキングス博士だって、こんなに早くこの装置が出来上がるとは思っても見なかっただろう。」

教授はこの装置に「超素粒子顕微鏡」という名を与えた。

装置の性能は素晴らしかった。理論上は倍率が無限大まで拡大出来る設計になっていた。倍率の拡大に成功すれば、クォークやレプトンの中の構造、いやそれよりもっと小さな素粒子の中、更にはその先の未知の領域まで鮮明に観察出来る装置だ。

「第一号の写真はネイチャーとサイエンスに同時に投稿しよう。装置の開発は秘密だったからな。きっと世界が驚くぞ。」

教授は夢と希望とで心が一杯だった。一抹の不安も感じてはいなかった。そして自信に満ち溢れていた。

「よし！ヘリウムガスを用意してくれ！」助手に不活性ガスの用意を頼み、同時に立会人として友人でもある天体物理学の教授に連絡を取った。

「君、今日これからの時間に空気が無いか？いよいよ例の装置を稼動してヘリウムの観察をしたいと思ってるんだ。是非君に立会人をお願いしたいと思ってね。」

彼もそれを聞いて興奮したようだった。

「そうか！遂に漕ぎつけたのか！これから講義だったんだが、自習にしてそちらに向かうよ。」

十数分後、友人がやってきた。ヘリウムガスの準備は済み、あとは電源を入れ観測するだけだ。

「待たせたな。こんな世界快拳の立会人になれるなんて、生涯に1度あるかないかだ。」

「待ってたよ。準備は整った。よし、電源を入れよう。」

電源ボタンを押すと、「超素粒子顕微鏡」は低い唸り声のような音を出し、動き出した。

「電源、安定しました。」と、助手の声が聞こえた。

「では、ヘリウムガスを注入してくれ。」教授はこれから起こる興奮を抑えながら助手に指示を送った。

「ヘリウムガス、注入します・・・10%・・・20%・・・100%完了です。」

「よし。ではモニターに映し出してみよう。倍率は・・・5000万倍だな。モニターは等倍に合わせてくれ。」

間もなくモニターに直径5センチの小さな粒が集合した大きな塊が4つ見えてきた。2つは若干白みがかった色をしていた。後の2つは少しグレーっぽい色だった。

「ヘリウムか・・・こんなに鮮明に映るなんて・・・まだ倍率は上がるのか？」友人の教授は興奮しきった様子で画面に食い入っていた。

「ああ、無限大まで拡大出来るよ。だが、どちらが陽子か中性子が解らん。倍率を更に5000万倍に上げてくれ。見やすそうな手前のグレーの方でいい。」

倍率が上げられた。その球体に近いものは、更に小さな粒が集合した球体が集合した塊だった。

倍率を上げた所で、画面に定期的に、ノイズが入って見えづらくなって来た。

「おかしいな？」教授は首を捻った。

「同じタイミングでノイズか。電子の通り道じゃないのか？」と友人が呟いた。

「そうだな。角度を少しずらしてくれないか？」

「角度、変えました。」

思惑通りノイズは消え、また鮮明な画面が戻ってきた。

「更に5000万倍にしてみよう。頼む」教授と友人はモニターに鼻の先が触れてしまうほど近づきながら、助手の操作を待った。

「更に5000万倍です。」

原子核の1つがモニターいっぱいに広がっていた。

「凄い・・・こんな光景見た事が無い。」2人は更に画面に食い入る。

「粒の塊がいっぱいだ。どれか1つをもっと拡大しよう。5000万倍でどれか1つを拡大してくれ。」

「では左上のを。5000万倍です。」

2人の目が点になった。この辺りで粒の群れも終わりかと2人は感じていたのだが、更にこの粒は小さな粒の集合体だった。

教授は少し不安を感じてきた。いつまでこの粒が続くのか。粒が終わったとすれば何が見えてくるのか。

「・・・1億倍でどれでもいいから見やすいものを拡大してくれ。」教授の声が少し詰まってきた。

「更に1億倍です。」

遂に1つの球体になった。もう粒の塊ではなかった。そして、内部の所々少しが光っているようにも見えた。

「なあ、これ以上見るのは何か嫌な予感がする。この辺りで止めたらどうだ？」友人が切り出

した。

教授も同じ事を考えていた。しかし、それも科学者としての探究心の比ではなかった。すぐに心の乱れは打ち消され、更にその先が見たくなってきた。

「もう1億倍だ。内部が透けてる様なので、何か見えるかもしれん。」教授は震える声で助手に頼んだ。

「倍率、上げました。教授？どうしたんですか？」助手もその雰囲気を感じ、何かただ事ではない事に気が付いた。

モニターに映し出された画像を見て、2人は少し震えていた。いや、恐怖を感じていたのかもしれない。少しずつ、ゆっくりと2人はモニターから遠ざかっていた。

「まさか・・・そんな筈は・・・」友人は完全に恐怖に支配されていた。直立不動のままモニターを見つめ、その体は諤々と震えていた。友人はその正体に既に気付いてしまっていた。

「もう・・・もう1億倍だけ拡大してくれ・・・これで最後にしよう。」教授も何となく気付き始めた様子だった。

「拡大・・・しました・・・これは・・・???」助手もサブモニターを見ながら驚いていた。どこかで見た光景がここにはあった。

モニターの先には「宇宙」が見えた。小さかったが星雲や銀河、超新星爆発のような小さく輝く点も見えた。

「どうやら神の領域まで来てしまったみたいだ。誰も見てはいけないものを見てしまったようだ。」

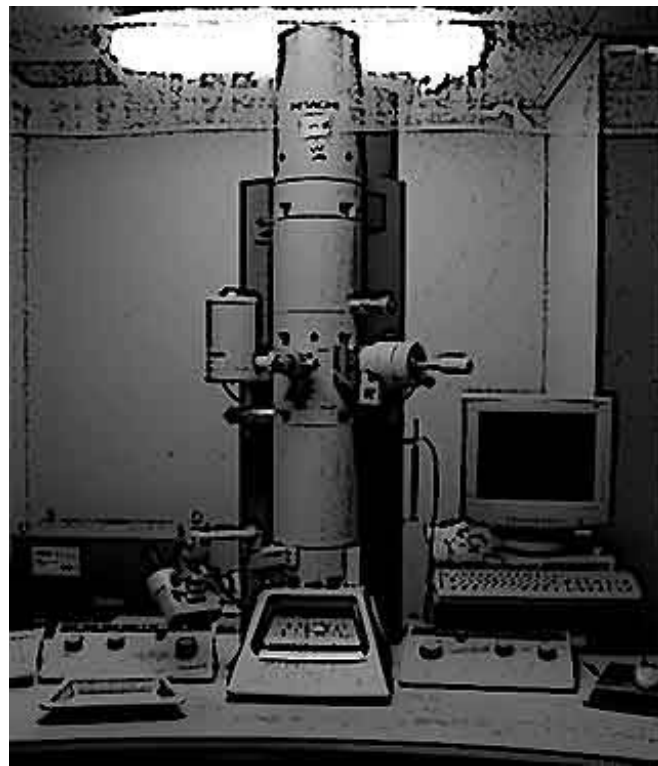
友人は傍にあった椅子にガタンと腰を落とし、もう動くことが出来なかった。目は虚ろで天井を見上げていた。

助手は体の震えが止まらなかった。

「ちょっと失礼します。」壁にもたれかけながら、部屋を出て行ってしまった。

教授はモニターから目を逸らすことすら出来なかった。

いつまでもそのモニターと向かい合い、自分の見てしまった「物」の怖さだけが彼の中で果てしなく渦巻いていた。



少し中毒がかったのかかもしれない。毎日のアダルトDVD鑑賞が私の生活には欠かせなかった。会社での業績が芳しくない私にとってはここがオアシスなのだ。

もうAVレンタルの専門店で通い続けて何年経っただろうか。いつしか店で一番の上客になり、VIPな待遇を受けることも少なからずあった。

新作が出れば、封を切って最初の鑑賞をするのは私だったし、観たい作品があれば頼むと必ず入荷してくれた。店は大規模なチェーン店に比べれば小さいだろうが、個人店としてはかなり大きい方だと思う。

広いフロアに2000点の作品がゆったりと並べられているが、店内の殆どのビデオは見尽くしたと言っても過言ではない。

ビデオ鑑賞中は全てのしがらみから開放された。孤独感、会社での苛め・・・アダルトDVDは私の心の全てを満たしてくれた。

会社も退勤時間に向かえ、ワクワクしながら店へと向かった。

「おいまたあの店行くのか？お前にはそれしか取り得がないからなー。業績よりもAV優先か、いいご身分だよな。」。いつも苛めにあっている先輩からまた蔑さげすんだ目つきで笑われながら馬鹿にされた。

言い返しても、また苛めが酷くなるだけだ。私は返事も早々に会社を後にした。

今日もVIP待遇だった。頼んでおいた新作が届いていた。いつものレンタルルームに通される。部屋は決まっていた、と言うより、ほぼ毎日通っているので実質は私の「隠れ部屋」みたいなものだ。マイカップ・マイティッシュ・マイゴミ箱まで完備・・・自宅より落ち着場所なのだ。

早速1本目から鑑賞開始。今回も可愛い娘が粒揃いで満足した。

ゴミ箱は使用済みのティッシュで満杯になっていた。

数ヵ月後、その日は私の誕生日だった。いつも苛める先輩が妙に優しくなったのが少々気に掛かる。

退勤時間担った頃、その先輩に呼び出された。また何かの件で苛められるのではないかと、ストレスが増大した。

呼び出された場所は非常階段だった。先輩は手に紙袋を持っていた。

「いつも苛めて悪かったな。今日は誕生日だろ？実は俺もAV好きなんだよ。これ、俺が好きな傑作選10本なんだ。コピーで申し訳ないがプレゼントするよ。是非見てくれよ。ラベルもコピーで作ったんだぜ！」袋を差し出され、半ば強制的に持たされた。

「あ・・・はい。ありがとうございます。」。断ればまた苛めも酷くなるだろう。しかも好きなアダルトDVDだ。断る理由もない。受け取って、今日は自宅で観る事にした。

帰宅後、早速先輩から貰ったDVD鑑賞を始める事にした。

「10本か・・・2本ずつ5日で踏破だな。」。ラベルの娘は知っているのもあれば、初物もあった。少し興味がそそられる。

早速手元に「必需品」の用意。そして高揚した気分を少し抑えながら、スタートボタンを押した。

女優さんはもちろん、ストーリーもカメラワークもそう悪くは無かった。中々上出来だ。が、美味しい場面に入ると少しノイズのようなものが入るのか、画面がチラチラする事がある。まあ、コピーものだし、コピーガード解除の機械を通してダビングしても、これくらいのチラつきはよくある事だ。

2日目・3日目と順調に鑑賞本数が進んでいった。いつしかチラつきも慣れてしまい、気にならなくなっていった。

いつも通り、ゴミ箱は使用済みのティッシュで山になっていた。

4日目の事だった。鑑賞中に少し違和感を覚えるようになった。興奮度の高まりが少し低いように感じ始めた。が、ゴミ箱を見るとその萎えも治まり、充実した時間を過ごす事が出来た。

5日目。かなりおかしい。DVDを観てもあまり興奮しなくなってきた。ティッシュの使用量もいつもの半分以下だ。体調のせいだろうか？いやそんな事は無いはずだ。ここ何年も風邪をひいても体調が悪く会社を休んでもAV鑑賞をしなかった日は無い。「何か」がおかしい。

遂に最後の1本になった。もうすっかり萎えてしまっていたのであまり見る気も起きなかったのだが、もう5日もレンタル店のマイルームを空けている。あまり開けるとマイルームが取られてしまう。今日この1本を見て、明日からはまたレンタルショップに通わなければ。

DVDがスタートした。が、始まりはあまり興奮は出来なかった。中盤、またいつものように画面がチラついてきた・・・一瞬何かが見えた。女優が裸になるシーンで違うものが、ほんの一瞬だが目に留まった。これは場面切り替えのノイズじゃない。話はまだ流れている。何だ？これは？

コマ送りをしてみた。コマ送りでAVを観るなんて初めてだ。1コマずつ、慎重に進める。

数十コマ進めた所で、そのノイズの素に突き当たった。背景の色は似せてあったが、全く違う画像がぼんやりと映っていた。

「ゴミ箱だ！」。思わず叫んでしまった。私の部屋のゴミ箱にそっくりなゴミ箱がその画面の中に映し出されていた。

サブリミナル手法だ。先輩からの”究極の苛め”だ。やられた・・・洗脳された。

気落ちした私はゴミ箱を片付けようと、ゴミ箱に目を向けた。だが、何故かゴミ箱に愛着を感じ、見るほどに興奮してきた。

我慢の限界を超えた私は、ゴミ箱を見ながらイッてしまった。女優さんの迫真の演技よりもただのゴミ箱に興奮を覚えてしまうとは。

暫く呆然とした。「ゴミ箱でイクなんて・・・」。気持ちは濃いブルーで満ちていた。そして溜まっていた怒りが一気に爆発した。「絶対仕返ししてやる！」と心に強く誓った。すぐに仕返しの計画を立て、ある旧友に相談を持ちかけた。彼らとは数年ぶりだったが、面白そうだと話が盛り上がり、早速計画実行に移った。

それから数ヵ月後、今日は先輩の誕生日だった。先輩はロックが好きだった。40を過ぎた今も週末はここ数年流行の「オヤジバンド」で楽しんでいる。今度は私の番だ。先輩を非常階段まで呼び出した。当然、紙袋を持って、だ。

「先輩、誕生日にビデオ、ありがとうございました。お礼と言っでは何ですが、先輩が前から欲しいと言っていたレアモノのロックバンドのCDとDVD、やっと探してきたんです。友人の持っていたもののコピーですけど、良かったら聞いて、見て観てください。」と紙袋を渡した。中にはCDが5枚、DVDが5本入っている。

「本当か？いいのか？悪いな～」。真剣に喜んでいた。後は観て聞いてくれるのを待つしかなかったが。

先輩に変化が現れたのは、約1ヶ月後の事だった。いつも同じ課の女の子にセクハラギリギリの態度を取っていた先輩がすっかりおとなしくなり、逆に同性を見る目に色気が出て来た。第一段階は成功だ。

更に新婚だった先輩は数ヵ月後、奥さんと別れてしまい、歓楽街で出会ったゲイと同棲を始めた・・・ミッション・コンプリート！

目には目を、歯には歯を。「ハムラビ法典」の原則に基づいて仕返しをしてやっただけなのだが。

「ざまあみろ！」私は心の中で笑いが止まらなかった。あの先輩が美人の奥さんを捨ててまでゲイと同棲までとは。

少し悪いなとは思ったが、今までの苛めの累積を考えれば、同等だろう。少しずつ返すか一気に返すかの違いだけだ。

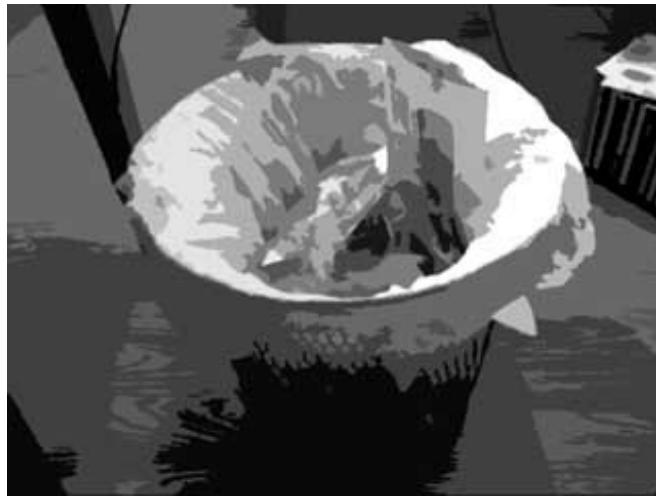
私が相談した友人は映像クリエイターと某大学の心理学の準教授。昔から仲が良かった。彼らのお陰で私は「ゴミ箱」から無事解き放たれた。持つべきものは旧友だとはつくづく実感した。

私が相談しに行った時、騙されたビデオを見ながらクリエイターの友人が、「コマの挿入は稚拙なサブリミナルなんだよね。ほら、某TV番組で大きく問題になったでしょう、宗教団体の教祖

のサブリミナル画像。チラッとすると気になっちゃうでしょ。完全に見えちゃうと、それはただの静止画像になっちゃうし。スリット挿入にすると画面もチラつかないし、洗脳効果も上がるんだよ。そうそう、使った画像はこれ。」。美しきゲイの写真の数々。

心理学の友人も、「ビデオにも入れたけど音楽CDの中に薄く相手の名前を男の声で誘うように連呼する音を入れておいたよ。超音波に近い高周波数と同時に連呼するようにね。人間って面白くってね、やさしく連呼されると、これが靡（なび）いちゃうんだよね。高周波数はモスキート音より高くて聞こえないけど洗脳効果は高いよ。」。

3人は顔を見合わせて、ニヤリと笑みを浮かべた。そして同時に「これで世界征服、する？」と冗談ながらに談笑を始めた。



必ず当たる”占い自販機”

近頃噂になっている店があるらしい。おみくじと言うか、簡単に言えば”占いの自動販売機”だ。機械から”お告げ”が書かれたカードが出てくるのだが、その的中率がどうやら100%だと言う話だった。

「まさかw・・・そんなのありっこないじゃん（笑）」。私は会社の休憩室で仲間数人と話を聞いていた。

「いやいや係長、それがねえ・・・」。と話し出したA美。「経理課にK子ちゃんって娘いたでしょ？私と仲いいんだけど、ほらこの間出合ったばかりの人とあっという間に入籍しちゃって・・・あれ、占い自販機の”お告げ”だったんですって！」

「へー。そうなんだ？それってたまたまじゃないの？」と、私。それは非科学的だ。百歩譲っても確率論の中の話だろう。

「違うの！違うの！。それが、後で聞いた話なんだけど～・・・」。もったいぶるな。

「で、その話って？」。早く話せ！

「おみくじに”今日最後に会話した人とすぐに結婚する”って書いてあったんですって！で、彼が、その日の最後の会話をした人で、その出会いってのがねえ・・・」。A美は話は上手いが、引っ張りも長い。1回毎に相槌を打たないと先に進まん。

「・・・ってのが？」。一気に話せ！！引っ張り過ぎww

「会社帰りで駅を降りた時に、たまたま道を尋ねて来た人なんですって！何か、もう、運命的～♪って感じで！」。ちょっと面白そうだ。少し気になってきた。周りの仲間も集中して聞き始めた。

「自動販売機って、普通に道端とかにあって500円くらい入れて”恋愛”とか”金運”とか、何かそんな項目みたいなのがあって、占って欲しい所を押せば何か出てくる訳？」。

「係長って知らな過ぎ～（笑）って言っても私もそこまでは聞いてないんですけど～、お店の中に変な形の機械があって、ボタンが付いてるんですって。で、その前に行く前に儀式か何かあるみたいな。そこはよく解んないんですけど。」。何かからくりでもありそうな感じだ。

「で、値段は？」。ここは肝心だ。有名占い師ばりに6万も8万も取られるんじゃ行けないし、自販機でウン万ってのもちょっと・・・。

「3,500円ですって！私も1回行ってみようかな～。でも行列が長くて時間がねえ～。」。うん。3,500円なら、飲み代1回分と思えば、ちょっと面白そうだ。少し行ってみたくなった。

「他に何か知ってる事は？」。情報は大切だ。A美の口ぶりからすれば、まだ何か知ってる様子だ。

「”他言無用”っていう封筒に、テレホンカードみたいなものが入っていて、それに”お告げ”が書かれているんですって。」。

「他には？」。行く気満々になってきた。

「う～んと・・・他には・・・」。流石の情報通A美嬢の情報量にも限りがあるようだ。

突然、いつもは寡黙な部下のT夫が話しに割り込んできた。

「そうそう、占いが当たる前に、他人に話すと”お告げ”の効力が無くなるそうですよ。それと・・・占いは選べなくて、出てきたカードが全てで、はっきり出来事の日時や場所が書いてある場合もあるし、意味不明の数字だけだったり・・・それは、多分ギャンブルに関係する数字とかでしょうけどw あと、良い事ばかりじゃなくて、事故を起こす時間や死ぬ時間・・・いつ病気になるとか、そういうのもあるらしいです。」。まあ、占いとは良い結果も悪い結果もあるだろう。しかし、T夫、結構知ってるな。こういうのには興味がないと思っていたんだが。A美もそこまでは知らなかったようだ。目を丸くして聞いていた。

「じゃ、悪い結果の時は他人に話せば回避出来るのかい？」。変な結果が出たら、少し怖いな・・・。

「ええ、多分。でも、知らない人に話してもダメなようです。身内、特に奥さんとか恋人・愛人など肉体関係のあった人、あとは子供、両親とかの近親の血縁関係でないと占いの効果は続くて聞いたことがありますね。」。そうか。一応回避策はあるようだ。

「じゃ、孤独な人が占いに行ったら悪い結果だったら、最悪だね。」。孤独な人にとってはギャンブルより酷いな。最悪の結果だったら・・・。

「そうでしょうね。受け入れるしかないでしょう。」。淡々と語るT夫。

「あと・・・」。少しT夫が言うか言わないか一瞬迷った様子だった。

「あと？」。何か”肝心要”っぽいな。

「どういうシステムなのかは分からないんですが、生涯一回しか占いの答えが出てこないらしいんです。2回目以降は何度行っても白紙のカードが出てくるそうですよ。」。そうか、大体把握した。今日、寄ってみるか。

「住所は？」。

「少し街の奥になりますね。会社の裏の道路から2丁下がって、駅の反対の方に行くと小さいアーケードのかかった商店街があるじゃないですか。」

「うん。ある、ある。」。商店街の名前は忘れたが、確かにある。

「そこの更に最後の方ですね。駅から見て遠いと言う事ですが、人が並んでいるのですぐ分かると思います。」。

「そっか。ありがとう。ちょっと面白そうなので、今日、寄ってみるわ。結果は当たってからの楽しみだねw 話すと効果が無くなっちゃうから。」

皆に”行ってきます”宣言をした。今日はうまい具合に定時退勤日だ。速攻で会社を出て行ってみるか！！

退社時間になって、走る様に会社を出た。小走りで20分ほどかかった。少し息が上がった。心臓がエンジンのように高回転している。少し心臓がチクチクする。「男、30も過ぎると体力落ちるな～^^」；」。独り言を言いながら、書店外を進んだ。思えば数年前に通りがかったきりだ。あれから更に錆び付いた感じがする。ここもそのうち郊外型チェーン店に負けて、再開発される

のかな？昔は商店街といえば「街の華」だったのだが。週末歩行者天国なんて良い企画だったのになあ。しかし来たる時代の波には逆らえないということか。

そんな事を思いながら歩いていると、行列が見えてきた。ここに間違いだろう。

「これ、占いの行列ですか？」。行列の最後尾に着いた私は、前に並んでいる人に聞いた。

「ええ、そうですが。あなたも占いを？」。初老の女性だった。

「ええ、ちょっと占ってもらおうと。」。場所が間違いのないならそれでよし。途中で買ってきた週刊誌を見ながら順番を来るのを待っていた。

行列の割には時間が掛かった。1時間ほどでやっと行列の半分まで進んだ。「あと1時間くらいかな？」。また雑誌を読み始め、順番を待った。

更に1時間ほどして、やっと店の前まで到達した。「あと少し！」と思っていたら、店員さんらしき人が一人一人になにやら説明のような事をして回っていた。やがて店員は私の所までやってきた。

店員が私に向かって話始める。「ようこそいらっしゃいました。ご存知かとは思いますが、この占いは生涯1回限りでございます。お越しになった日によって占いの答えが変わってまいります。今日で宜しいですか？」。神妙な面持ちで淡々と語る店員。

「ああ・・・問題ないね。」。本当に困った時に来た方が良かったか？一瞬躊躇したが、いつ来ても答えは似たようなもので、一種の“確率論”だと思っている。100年後には生きていないだろうし、明日来たからといって、そう大きな変化はないと見た。

「では、料金は3,500円になります。ご用意下さい。受付けにて料金と引き換えにお札と法衣を渡されますので、お着替え下さい。その後にお呼びされた順番で占いを差し上げる部屋にご案内いたします。それでは。」。着替えるのか・・・ま、スーツの脱ぐ着るは少々面倒臭いが、まあ、決まり事なので仕方が無いだろう。

その間、店から出て行く人を何人も見かけた。占いが終わった人達だろう。満面の笑みを浮かべながら出て行く人、悔しさを滲ませながら去っていく人、全速ダッシュで逃げるように出て行く人、人生の終わりのような顔をした人、無表情・・・様々な人々が店を後にしていった。私はどの部類に入るのだろうか？

間もなく受付けまで進んだ。カウンターは銭湯のカウンターのように高い位置にあり、上から見下ろすように受付けの男がこちらを見ていた。用意した3,500円を渡すと、彼は蒲鉾の板のようなものに番号と他に何か書かれた札を私に手渡した。「5月20日 1203番」と書いてあった。今日の日付と通しナンバーのようだ。中央に書かれたお経のような文字は読めなかった。

「では、あちらの場所でお着替え下さい。必ず下着まで全てお脱ぎ頂いてからお着替え下さい。」。試着室のような場所に案内され、着替えを始めた。「T夫が行っていた”儀式”ってやつだな。でもまさかパンツまで脱がされるとは・・・失礼な。」。ブツブツ言いながら、しかしここまで来たのだから、もう少しの辛抱だ。占いが終わった人は別の出口から出て行くようだ。入った人が出て来る事は、無かった。

着替えを終え、待合室で暫しの待機。間もなく「5月の20日、1203番様！」と呼ばれた。ついに私の順番だ。店員が私の着替えを入れた籠を持ち、「部屋に入りましたら、まずお清めの水でお手をお洗い下さい。その後その札を機械に入れ、心を落ち着かせ、何も考えず無心になりましたらボタンをお押し下さい。間もなく1枚の封筒が出てまいります。封筒を受け取りましたらあちらのドアからお出になって頂きます。お着替えが終わりました後で封を切り、中をご覧ください。その中に書かれている事が必ず起こります。ではどうぞ。」

いよいよ核心の部屋に到着した。部屋は8畳ほどの大きさだったが、中の壁は漆塗りのような真っ黒な壁と、柱は金で飾られていた。中央の機械も金と朱で彩られた少し高さのある円盤型の形で、その奥に光り輝く仏像のような彫り物が一体だけ飾られていた。

いよいよ占いの始まりだ。

まず、言われたとおりに入り口近くの手洗い場で手を洗い、機械の前に進んだ。そしてお札を機械に入れ、目を閉じた。だが、無心になろうとしているのだが坊さんのように修行を積んでいる訳も無し。無心になるには10分ほど掛かったかもしれない。

そうこうしている時、一瞬”無”が体の中を走り抜けた。「今だな。」と、私はボタンを押した。

2分ほどで機械から1枚の封筒が出てきた。「他言無用」と書いてある。T夫の言った通りだ。そのまま出口を出、着替えを済ませて封筒を開けてみた。中には1枚の名刺大のカードが入っていた。そこには、こう書かれていた。

本日午後八時二十六分、心の発作にて天寿を全うす

「え???」。一瞬全身が凍りついた。「心の発作って・・・心筋梗塞じゃん！」小走りした時に心臓がチクチク痛んだのはこの前兆だったのか？で、今何時だ????慌てて腕時計を見る・・・ヤバい!!!8時20分じゃないか!!!”確率論”と小馬鹿にはしていたが、いざ目の前に突きつけられるとそうとも言っていられなくなって来た。

「え～と・・・T夫が何か・・・そうだ！肉親に連絡を！」。時間が無い。走って店を出た。どうやら私は「満面の笑み」の方ではなかったようだ。占いを求めて並んでいた客の誰かも私が並んでいたときの様に、出てくる客を観察しているのだろうか。

いや、もうそんな事はどうでもいい。まずは電話だ。携帯を取り出し、自宅にかける・・・話中だ。妻の得意技は「長電話」だった。キャッチホンにはしてあるが、多分取らないだろう。20コールほど待ったが反応は無い。

「こんな時に!!!」。妻の携帯にかけてみよう、気が付くかもしれない。「・・・」電話は鳴っているようだが、無視しているか遠くに置いてあるか、マナーモードか・・・あ、よくバッグに入れっぱなしにしてるんだ。これもダメか。

息子は・・・ああ、携帯は持たせているが小学校の低学年。帰宅後は電源切ってママにお預けだ。他はないか？？？

両親だ！これしかない。電話番号は・・・これだ・・・「只今留守にしております。ご用件の・・・」。温泉旅行だった！！先週小遣いを少し送ったのを思い出した。

仕方が無い。最後はA美だ。飲み会の勢いで1回だけ関係を持ったことがある。恥じてる場合じゃない。「・・・」電話中だ・・・終わった。

「チクッ！」と針を刺したような痛みが心臓に走った。もう始まったか・・・痛みがだんだん大きく、そして息も苦しくなってきた。

大丈夫ですか？声をかけてくれたのは、部下のT夫だった。「お前、何でここにいるんだ？」。何故だ？

「コンビニの帰りなんです。家近がすぐそこで。ちょうど占いに行くと聞いたので、もしかしたら会えるかなと思ひまして。いや、そんなことよりまずは救急車を呼びましょう。携帯貸して頂けますか？」。

「ああ、頼む。」もう、苦しくて意識が遠のきそうだ。T夫は119に電話をかけようとしていた。「もしもし？急患なんです。もしもし・・・あ、電池が切れてしまいました。誰か～！！！救急車を！早く！死にそうなんです！！！」。

持つべきものはよい部下・・・か。時計を見た。8時25分と30秒。もう救急車が来てもに合わんだろう。このカードのお告げ通りになるのは間違いない。

・・・だんだん・・・い・・・意識が・・・遠く・・・

時間は8時26分を少し回っていた。死亡した私を見ながらT夫が、「先週占いに来て、”5月21日に急遽昇進する”って書いてあったのは、この事だったんだ。何となくこんな予感がして見に来たけど間に合わなかった・・・あの時休憩室で話をしていれば・・・」

彼は私を抱きかかえ、泣きながら、いつまでも救急車が来るのを待っていた。



ご主人様、何故そんな事をいきなり仰（おお）せ出すのでしょうか。私には全く理解が出来ません。

この長い期間、雨の日も風の日も、また凍て付くような寒さや猛吹雪の中でも、いつもご一緒させて頂いていたではないですか。

それは、私も多少し歳を老いたのは承知しておりますが、まだまだ現役としてご主人様に仕えるだけの気力と体力は十分備わっていると思っていました。ご主人様が私の代役を連れてお帰りになった時は、少し驚きを隠せませんでした。が、「ああ、何年か掛けてこの者を教育し、そして教育が終わった暁には、この者と交代をしなくてはならないのであろう。」と覚悟はしておりました。

それをご主人様は、「今日から”暇だ”。貴様は要らぬ。」と申されました。どうしてでしょう。何故なのでしょう。

思い出す事は沢山ございます。毎回のご家族のご旅行にもご一緒させて頂きました。それはどれも楽しい旅行でした。花見、祭り、温泉・・・どれも皆楽しい思い出ばかりでした。

奥様とのショッピングやお友達との映画鑑賞にも何度もご一緒させて頂きました。あれは楽しい1日でした。

無念な出来事ではありましたが、ご主人様のお婆様が亡くなられた時も、奥様のお父様が亡くなられた時も、一番最初に駆けつけたのは私共でございます。

また、私が足を痛めた時はまるで自分の事のようにご心配頂き、毎日のように見舞いに来て下さった事は今も昨日の出来事のように思い出されます。ご主人様はとても優しいお人柄だということが目に沁みて実感いたしました。

体を痛めた時もそうでした。私の治療に付き添い頂き、ずっと私を見守って下さいました。

ご主人様が体を壊し入院された時は、一日おきに必ず奥様とご一緒に見舞いに向かったのも、つい先日のようにしっかりと記憶しております。

奥様のご病気の通院には一回も欠かさず病院まで付き添い、奥様をまた無事に家までお返し致しました。

ご主人様が奥様に黙って何度も「逢い引き」された時も奥様に分からぬ様に話の辻褄（つじつま）を合わせ、見知らぬ顔をしていたではありませんか。

これだけ尽くしてきた私を、「暇」の一言で片付けてしまうのですか。無念でなりません。せめて、せめてこの新しく来られた代役が使い物になるかどうか見定めてからでも遅くは無いのでしょうか。

お坊ちゃま達のやんちゃぶりや粗相（そそう）にも耐え忍んで来られたのは、私だけでございます。その「代役」に何が務まると申されるのでしょうか。

しかし、それも今日限りで終わりでございますね。私はとても悲しく、残念な思いで一杯です。いつかこの時が来るやもしれないとは思っておりましたが、それが今日の今朝とは。

私はご主人様にお世話になる時に、「この方の許（もと）で、倒れても、老いても、そして最後の時までも尽くそう。」と心に決め、そして、その通り一筋の心の乱れも無くここまでお勤め申し上げてきました。

しかし、これも今日にて最後でございます。間もなく迎えの者が来ると聞いております。荷物はもう、纏めてございます。お迎えが来れば、いつでも次の場所へ向かう準備は出来ております。

無念でありませんが、恨みは致しません。ただご家族皆様との楽しい思い出がいっぱいありすぎて感傷に浸りたい時間が少しだけ欲しかったのです。

今も、もう何年か、いや、数ヶ月か、数週間か……数日でも長く皆様にお仕えしたかったという思いだけで心が一杯になってしまいます。

もう、ご家族皆様とお会い出来なくなると思うと、今にも胸が張り裂けそうな思いです。どうぞ皆様、いつまでもお元気で健やかに暮らし頂けます様に。どうやらお迎えも来た様でございます。ごきげんよう。このご恩は一生忘れる事はないでしょう。

「あ、来た来た！遅かったね。」

「すいませ〜ん。道路、混んじゃって。」

「書類は？」

「あ、後で解体証明出しますんで、後日纏めて。」

「分かった。でも……ちょっと寂しいな。14年で16万キロか。よく頑張って乗ったよな、俺も。」

「長生きした方じゃないんですか？もう殆ど見かけなくなりましたからね。この車種は。」

「そうだよな。買った時は街に溢れてウンザリだったのに、気付いたら家だけだもんな。」

「車もきっと感謝してますよ。じゃ、持ってきますんで！」

「宜しく〜！」

14年走り続けたマイカーが、新車と入れ替わった日だった。

最後の審判

ある傲慢で大金持ちの男が突然心臓発作で亡くなった。坊さんが5人でお経を唱え、葬儀は盛大に行われ、戒名も最高級のものが与えられた。

男は、自分の葬式を見ていた。ちょうど司会者の後方、2mくらいの高の所から泣いて悲しむ家族の姿や、遺産が転がり込むのを想像していたのだろうか、俯（うつむ）いて笑みを浮かべながらお経を聞いている者もいた。

「あの野郎！絶対崇ってやるからな！」。などと思いつつ、暫く様子を眺めていた。

暫くすると、後ろで男を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、白装束に身を纏った若い男性が立っていた。彼は手招きをしてこちらに来るように促した。男はだんだん意識が遠くなり、呼ばれるがままにその男の後についていった。

「さあ、着きましたよ。」。白装束の男は、男を呼び起こした。

「ここはどこだ？天国か？地獄か？」。真っ白い部屋に真っ白なベッドと寝具。その上で男は目を覚ました。

「いえ、まだその前の段階です。ここで最初の審判が行われ、天国への扉へ進むか地獄への扉へ進むかが決められます。」。白装束の男は答えた。

「俺は天国に決まってるだろう！金も名誉もある！戒名だって最高級のものをもらった。これで十分だろう！さあ、早く天国行く扉を早く開けろ！」。男は自身ありげに答えた。

「いえ、そうはいきません。審判を待つのです。」

「うるさい！どけ！この野郎！」。白装束の男の制止を振り切って片方のドアを開けようとしたが、ドアは頑丈で鍵が掛かっている、開けることは出来なかった。

間もなく男の名前がどこからとも無く呼ばれた。そして、お告げのようなものが聞こえてきた。

「貴方は天国への扉に入る事を許されました。お入り下さい。」

「そうだろう。当たり前だ！俺を誰だと思っている！どっちだ？右か？左か？」。男は急かすようにお告げが聞こえた方向に向かって叫んだ。

「それは、貴方が決めてください。そして、中に進む毎に扉が1つずつ現れます。質問には正直に答え、神の求めるものは全て差し出して下さい。」。白装束の男は、注意を促した。

「おお！もう死んでるからな。懺悔でも現金でもなんでもしてやるよ。」。男は2つ並んだ扉の前まで進んでいった。

「仏教か何かで、”左手は不浄”とか言ってたな。よし、右の扉にするか。」。男は右の扉を選び、中へと進んでいった。

少し歩くと、1つ目の扉が見えてきた。

「そこで立ち止まりなさい。」。声が聞こえた。

「ここか？」。男は確認するようにその場所で止まった。

「貴方は今まで悪いことをしてきましたか？」。声が質問してきた。

「ああ、いっぱいやったさ。数え切れないくらいだ。記憶に無いものも一杯あるだろうさ。」。男は答えた。

「正直で宜しいですね。。では、次の扉に進んで下さい。」。男は言われるがままに、次の扉を開けた。

また少し歩くと、2つ目の扉が見えてきた。

「そこで立ち止まりなさい。」。また、声が聞こえた。男は立ち止まり、次の質問を待った。

「貴方は家族を大事にしてきましたか？」。声が質問してきた。

「う〜ん・・・」。男は少し考えていた。家族には裕福で贅沢な暮らしはさせていたが、スキンシップや家族と共に過ごしたという点では、今更ながら若干の後悔はあった。

「どちらとも言えん。何不自由ない生活は送らせたが、共に過ごした時間は少なかった。これが正直な答えだ。これでいいか？」。男は正直に答えた。

「正直で宜しいですね。。では、次の扉に進んで下さい。」。男は言われるがままに、次の扉を開けた。

また少し歩いた。扉が見えてきた。しかし、今度は少し様子が違った。扉が2つあった。その片方の扉の横に円柱型のテーブルのようなものが置いてあった。

「そこで立ち止まりなさい。」。また、声が聞こえた。男は立ち止まり、次の質問を待った。

「では、これが最後の扉になります。今度は質問ではなく、お願いになります。聞き入れられないならば、テーブルの無い扉が開きます。こちらは地獄行きの扉です。聞き入れられたならば、反対側の扉が開きます。こちらは天国行きの扉です。宜しいですね。」

「おお！お願いでも命令でも何でも言ってくれよ。俺に出来ない事は無い！」。少しイラついた口調で男は返事をした。

「では、お願いを致します。そのテーブルの上に、現金1000万円を積み上げてください。」

「チッ・・・地獄の沙汰も金次第か！1000万かたったそれだけか？すぐ用意してやるよ。待ってろ！持ってきた袋の中に現金がたくさんある。賽銭替りに少し分けてやるよ！」。男は来た道に戻ろうと振り返ったが、もうそこには扉は見えなかった。

「おいおい！ちょっと待ってくれよ。戻らないと1000万は取って来られないぞ！それでもいいのか？扉を出してすぐに開けろ！」。男は恫喝するかのように声に向かって怒鳴り散らした。

少し経って、また声が聞こえてきた。

「貴方は最後に嘘をつきましたね。天国に行くにはお金は必要ありません。そして死人は生前に身に着けていたものや現金を持ってここに来る事は出来ないのです。貴方の地獄行きが決定しました。」

「なにお〜！ふざけんな！この馬鹿野郎！さっさと来た道に帰せよ！」。男は興奮しきって

いた。

その時、1つの扉が開いた。その奥は真っ暗で、人の嗚咽や逃げ惑う叫び、断末魔が聞こえてきた。男は恐怖心で一杯になり、走ってその場を逃げようとした。が、開いた扉がまるで真空状態のように空気を勢い良く吸い込み、男はだんだんとその扉に吸い寄せられていった。

「あ～！！！！」。男は激しく抵抗したが、最後には地獄へと落ちていった。そして引き寄せる風が止み、扉は静かに閉まっていった。

「残念です。最後の願いは、人間の”欲”を試すものだったのですが……現金は無いと正直に答えれば、天国行きだったのですがね。」

地獄の沙汰も金次第だった。だが、それは下界だけの話。死人は物を持って旅立つことは、決して無い。



ある寺が街の都市開発の条例により引っ越すことになった。その寺には15mもあろうかと言う大きな仏像とそれを覆うように大仏殿が建てられていた。寺の引越しは寺が昔から保有していた山の中腹の見通しの良い場所に建立される事になった。

数ヶ月と言う長い期間をを経て、敷地内の堂塔や僧坊、社務所などが次々と解体され、山に運搬され、再建立された。最後に敷地内に残ったものは大仏と台座だけとなった。

いよいよ大仏の引越しが始まった。天気はうす曇ではあったが、搬送にはうってつけの天候だった。推定200 t もなろう大仏に最新のクレーン車が6台が用意され、慎重に吊り上げ用のワイヤーが掛けられた。大仏の数十メートル手前にはNASAのスペースシャトルを乗せる台車を彷彿とさせるような特製の搬送車両が用意され待機していた。

「よし、ゆっくり上げてくれ。毎秒3センチだ。」。6台のクレーンを同時に指揮する現場監督が無線で全員に指示を送った。

大仏は座禅を組んだその格好のまま少しずつ宙に浮いていった。僧侶達は搬送の無事を願い少し離れた場所から経文を唱えていた。

「はい、止め。」。クレーン車が一斉に止まった。

大仏は30分ほどかけ5mの高さまで持ち上げられた。後は平行に移動し、搬送車両に載せるだけだった。

「では、平行移動に移る。毎秒30cm。始めて。」。クレーン車は大仏を吊り上げたまま、搬送車両に向かってゆっくりと進んでいった。

その時だった。突然突風が吹き荒れ、寺の周辺を直撃した。仏像が2回、3回と大きく揺れ、前面を吊り上げていたクレーン車がバランスを崩し、横倒しになった。大仏も横倒しになったクレーン車同様に前面から倒れ落ちた。

「しまった！ワイヤーを緩めて！」。現場監督と僧侶達は慌てて大仏に近寄り、ひびや割れがないかどうかのチェックに走った。幸い大仏が倒れた場所は柔らかい土の上だったので、最悪の事態は避けられた。クレーンも横倒しになっただけで、怪我人もなく、予備のクレーン車で元の位置に立ち上げられた。

「申し訳ありません。こんな良い天気の日突風が吹くなんて・・・」。現場監督は心配そうに見つめている僧侶達に向かって謝った。

「いえ、これもまた仏様から頂いた試練でしょう。」。僧侶達は作業の無事を祈っていっそう大きな声で経文を唱え始めた。

「では、この位置から吊り直した。まず倒れた大仏を起こす。前の3台は緩めて。後ろの3台は引いて。」。大仏はゆっくりと立ち戻った。

「じゃ、吊り上げを再開する。先程と同じ毎秒3センチだ。始めて。」。土の上に座った仏像が

またゆっくりと吊り上げられていった。

50 c m程吊り上った所で2回目の事件が起きた。先程倒れたクレーン車のワイヤーが突然鈍い音を立てて切れてしまった。倒れた時の衝撃が何かで滑車付近のワイヤーに傷が入っていたようだ。大仏は座禅を組んだそのままの姿で垂直に尻餅をつくように落下した。

「申し訳ございません。もう、何と言って良いのやら・・・」。現場監督はまた僧侶達に謝った。

「いえいえ、これもまた仏様から頂いた試練でしょう。どうぞ作業を続けて下さい。」。僧侶達は作業の無事を祈って更に大きな声で経文を唱え始めた。

「頼むぞ！仏の顔も三度だ。次はないぞ！慎重に頼むぞ。」。現場監督とクレーン車の作業員はワイヤーや滑車の点検を丁寧に済ませ、異常が無い事を確認し、作業を再開した。

「よし、ゆっくり上げてくれ。先程と同じく毎秒3センチだ。」。6台のクレーンを同時に指揮する現場監督が無線で全員に指示を送った。大仏は座禅を組んだその格好のまま少しずつ宙に浮き、30分ほどかけ5mの高さまで持ち上げられた。

「はい、止め。次は平行移動に移る。毎秒30 c m。始めて。」。クレーン車は大仏を吊り上げたまま、再度搬送車両に向かってゆっくりと進んでいった。

その時だった。後ろのクレーン車が大仏の重みに耐え切れず、前に倒れた。大仏は5mの高さから落下し、仰向けに倒れた。

「痛いのか・・・」。どこからともなく声が聞こえてきた。その声の主は大仏と気付くのにそう時間は掛からなかった。作業員や僧侶達は驚きのあまり声も出ずに仏像を見つめていた。

突然大仏が動き始めた。立ち上がり、打ち付けた後頭部や額、尻などをを撫でながら痛そうに顔を歪め作業員と僧侶達に話し始めた。

「3回目じゃ。もうよい。これ以上は痛くてたまらん。歩いていくぞ。」。大仏は自らが座っていた台座を背中に抱え、一歩ずつ大きな足音を立てながら大仏殿のある新しい場所へと歩いていった。

